

主 題：ヘイ：神のことばと回復の道  
 聖書箇所：詩篇 119篇 33-40節

霊的落胆は私たちがそれを認めたくないと思っても、非常に多くのときに私たちに襲いかかって来るものであるだろうと私は思います。人生のあらゆる曲がり角から、いろいろな角度から、「落胆」という強い風が私たちが襲って来ると、そのように感じる場合があります。私たちは落ち込むこと、落胆していること、悲しみの中に沈んでしまっていること、そのような状態にあることを好んではないのですが、そのような状態に陥ってしまったときに、私たちはそこから抜け出すことができないと嘆くことが多くあります。どうすれば、そのような状態から抜け出すことができるのか？それが分からないのです。ここ数回、皆さんとともに詩篇119篇を学んで行く中で、私たちはそのことに関して、著者のことばを通していっしょに考えて来ました。著者は、どのようにすれば私たちが落胆に陥らないように生きることができるのかを、119：17から始まる第3区分で教えてくれました。そして、25節から始まる第4区分では、そのように落胆した状態に、絶望の中にあるときに、どのようにそこから立ち上がって行くことができるのかということをお教えしてくれました。

今日、私たちは第5区分、ヘブライ語の「ヘイ」という文字で始まる部分を見て行きます。そこで著者は、絶望の中にある私たちがしっかりと立ち上がって、回復の道を歩み続けて行くために必要なことが何なのかを教えてください。この119：33-40の八つの節の中で、著者は9回、神に祈りをささげます。「神さま、このようにしてください。」と願い求めるのです。40節を除く、33-39節のすべての節が「祈り」から始まります。これらの祈りを通して、どのように回復の道を歩んで行くことができるのか、そのことを皆さんとともに考えて行きたいと思えます。

この箇所を見て行く前に、皆さんに二つの事柄を覚えていただきたいと思えます。その一つは、この著者がいかに謙遜をもっていたのか、へりくだっていたのかということであり、もう一つは、著者が理解していた自分自身のもっている責任です。著者がここで祈りをするときに使っている動詞の形は「神さま、どうぞ、あなたが〇〇をしてください。」です。「私がこのようにすることができるように、あなたが働いてください。」、そのような祈りです。彼が認めていることは「私は私の力ではこれできません。」です。「だから、神さま、どうぞ、あなたが私のうちに働いてこれらを為してください。」と言います。自分のうちに力がないことを知り、自分が願うような生き方を、自分自身ではできないことをしっかりと理解しているへりくだったこの著者は、神の前に願い求めるのです。同時に著者は、自分では何もしなくても神が働いて自動的に変わって行くなどと考えていないことをよく覚えておいてください。

彼はしっかりと自分のもっている責任を理解していたのです。そこには完璧なバランスがあります。私たちは自分の力ではできない、だから、神の力によって助けられなければいけないのですが、神の力が働くなら私たちは自分で何をしなくても、勝手に変わって行くのでしょうか？そうではありません。神は私たちに命令を与えます。このようにしなさい、と。そのように命じられているなら、私たちはそのように生きなければいけないのです。ただ、それを生きて行くに当たって、私たちには神からの助けがなければ絶対にそれができないことをよく認めていなければいけません。そのことをよく理解し、そのバランスをしっかりと保った上で、私たちは初めて、ここで著者が私たちに教えようとしている内容を正しく理解することができます。そして、それを私たちの人生に正しく適用することができるのです。

皆さん、忘れないでください。私たちは自分の力で神が望まれるような生き方をすることは絶対にできません。ただ、祈り願うなら、それで自動的に神が望まれる人物になるのかというと、そうではありません。バランスが必要なのです。そのことをよく理解しているこの著者は、33節から、このような落胆の中にあって、どうすれば回復の道を歩み続けて行くことができるのかを私たちに教えてくれます。早速、ごいっしょに見て行きましょう。33-40節を読みましょう。

：33 主よ。あなたのおきての道を私に教えてください。そうすれば、私はそれを終わりまで守りましょう。

：34 私に悟りを与えてください。私はあなたのみおしえを守り、心を尽くしてそれを守ります。

：35 私に、あなたの仰せの道を踏み行かせてください。私はその道を喜んでいきますから。

：36 私の心をあなたのさとしに傾かせ、不正な利得に傾かないようにしてください。

：37 むなししいものを見ないように私の目をそらせ、あなたの道に私を生かしてください。

：38 あなたのことばを、あなたのしもべに果たし、あなたを恐れるようにしてください。

：39 私が恐れているそしりを取り去ってください。あなたのさばきはすぐれて良いからです。

：40 このとおり、私は、あなたの戒めを慕っています。どうかあなたの義によって、私を生かしてください。

いったい、私たちはどのような道を辿らなければいけないのでしょうか？

## ☆ 回復の道を歩み続けて行くために必要なこと

著者は五つのカギとなる事柄を教えてください。

### 1. 正しい理解をもっていること 33-34節

神のみことばをしっかりと正しく理解していることこそが、私たちが回復の道を歩んで行くために必要なことだと言います。それゆえに、著者は「どうぞ、私がしっかりとみことばを知ることができるように教えてください。」と祈り、「悟りを与えてください。」と願うのです。皆さん、考えてみてください。この詩篇の著者は、聖書全体の中でも最もみことばに関するすばらしい知識をもっていた人物だと思いませんか？そうでなければこの119篇は書けるはずがありません。けれども、彼は「私にはまだ足りない」と言います。だから、彼は繰り返して願い求めるのです。「私に教えてください。悟りを与えてください。」と。

#### a. 教えてください

実は、彼はこのような祈りをすでにささげていました。119:12「主よ。あなたは、ほむべき方。あなたのおきてを私に教えてください。」、また、前回見た26節にも「私は私の道を申し上げました。すると、あなたは、私に答えてくださいました。どうか、あなたのおきてを私に教えてください。」とあります。33節から始まる第5区分は、25-32節で語っていたことの結論の部分とも言えます。なぜなら、25節からは「道」ということばがカギとなっていることを見ました。同じように、33節で「主よ。あなたのおきての道を…」と言います。話は続いているのです。その中で、彼は再び同じ願いをして行くのです。「どうぞ、教えてください。」と。ただ、日本語の聖書ではよく分からないのですが、12節と26節にあった「教える」と33節のそれは違うことばが使われているのです。33節の「教える」ということばにはこのような意味があります。「指を指して示す、具体的な指示を与える」です。つまり、ここで著者が祈ったことは「あなたのおきての道を、あなたが具体的に指を指して私がそれをしっかりと知ることができるようにしてください。」ということです。単に、知りたかったのではないのです。単に、教えて欲しかったのではありません。彼はどのように具体的にその道を歩んで行くことができるのか、指し示してくださいと祈ったのです。神の特徴を豊かに反映させる道を知りたいと。その願いは一時的なものであるわけがありません。救われている者の心からの願いは、神の特徴に沿った道を歩み続け、神が望まれるような人物へと成長して行きたいというものではありませんか？それはある特定の期間だけに起こることではないはずです。確かに、この著者は多くの知識をもっていました。多くの理解をしていて、私たちよりも遥かに神のみことばがどれほどすばらしいのかを実際に体験しながら生きていた人物ですが、それでも彼は何度も繰り返して「私は継続的にあなたの道を教えて欲しい。どうぞ、あなたが指し示してください。その理解を与えてください。」と願うのです。

私たちは確かにいろいろな機会に学びをして、いろいろな知識をもっているでしょう。でも、私たちの驕りは「これだけ勉強したからもう十分だ。」と思うことです。皆さん、この地上にいる限り、みことばの学びでもう十分だと言えないことはないのです。この著者が「もっと教えてください。」と言うなら、私たちは遥かにもっと「教えてください。」と祈り続けなければいけません。「神さま、私のうちに学びたいという願いを与え続けるようにしてください。」と。

#### b. 悟りを与えてください

知識だけでは十分ではありません。それをしっかりと悟らなければいけません。「正しい理解を与えてください。」と願ったときに、彼は二つのことばを合わせました。「教えてください」「悟りを与えてください」と。数学の方程式をどれ程覚えても、実際にそれをどのように使えばいいのかを分かっているなければ意味がないと思いませんか？私は以前に学んだ方程式の幾つかは頭の中に残っていますが、どのように使えばいいのかは全然覚えていません。実際に中高生の教科書を見て、方程式は憶えていても使い方が分からないから答えが出て来ません。英語の文法を習いますが、どれ程文法を知っていても実際に使うことができないなら、余り意味がありません。同じように、私たちが聖書のみことばをどれ程よく知っていたとしても、それをしっかりと悟ることがなければ、理解することがなければ、私たちはみことばの理解において、それは役に立たない知識でしかありません。私たちのクリスチャンとしての歩みにおいて、余り益にならない知識しかないことになります。だから、著者は祈るのです。「私に悟りを与えてください。」と。

いったい、どのようにして知識を得、悟りを得ることができるのでしょうか？著者の答えは非常に簡素なものです。「神に祈りなさい、神にそれを求めなさい。」です。神があなたに学びたいという願いを与えるようにし、神があなたに理解を備えてくれるように祈りなさいと。皆さんもよくご存じのように、私たち生まれながらの人間は霊的真理を理解することはできないのです。パウロがIコリント2:14で「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。ま

た、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。」と言う通りです。私たちは神の存在が確かであることを知らないのではありません。知っているのですが、その知識を心の奥底に押しやって、それは「ない」と言うのです。神のすばらしさは被造物を通してはつきりと現わされています。私たち人間はそのことを知っているけれど、霊的な真理に目を向けようとせず、それを受け入れようとしません。だから、神の働きがない限り、御霊に属すること、霊的な知識を得ようとしません、それを理解することもできないのです。ゆえに、私たちは神の助けを求めます。救われた私たちも同じです。

ペテロがイエスの質問「:15 あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」に答えて「:16 あなたは、生ける神の御子キリストです。」と言いました。そのペテロに対してイエスはこのように言われました。「:17 『バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。』」（マタイ16:15-17）。ペテロがその知識を確かに得たのは神がペテロに備えたからです。私たちには神の測り知れない真理、霊的な知識を得るために神の助けが必要なのです。だから、著者は祈ったのです。「どうぞ、それを与えてください。」と。

そして、祈るだけでなくその道を生きようとしなければいけません。その理解に基づいて生きなければいけないのです。だから、彼はこのように付け加えています。「そうすれば、私はそれを終わりまで守りましょう。」「私はあなたのみおしえを守り、心を尽くしてそれを守ります。」と。ここに彼の決意を見ることが出来ます。私はこの地上にある限り、ずっと心からあなたのみおしえを守る決意をもっていきます。知っているだけでは十分ではありません。それを生きなければなりません。生きる決意が必要です。

教会の中には三つのグループのクリスチャンが存在するとある先生が言っています。一番目は「無知な怠け者たち」、二番目のグループは「学生を職業として行っている人たち、学ぶことを仕事にしている人たち」、そして、三番目は「最前線に立っている兵士たち」です。「無知な怠け者」とは、難しいから、大変だからと学ぶことを諦めている人です。わずかな知識をもっているだけで「私はそれで十分だ」と言います。だから、続けて学んで行こうとしないのです。だから、彼らは怠けているゆえに、いつまでも無知なままの状態で居続けるのです。そして、この世の生活に甘んじてそこに満足を見出そうとします。「学生であることを職業とする」、プロの学び屋です。この人たちは聖書の知識を得ることだけに焦点を置いている人です。だから、神学的な事柄に詳しいのです。いろいろなときにみことばの引用をすることができ、学びには熱心に参加します。けれども、彼らは学ぶことだけにしか意識がないので、それが実際に具体的に生活の中に反映されていないのです。パイサイ主義者のようです。そして、三つ目のグループは「最前線に立つ兵士」です。彼らはみことばを学ぶ機会を無視できないのです。彼らのいのちがそこに懸っているからです。みことばが教えていることを知らないなら、彼らは最前線で戦いに敗れるのです。彼らは学ぶだけでは満足することができません。なぜなら、学んだ知識を生かす方法をしっかり知ってそれを生きて行かなければ、彼らは打ち破れるからです。皆さん、神はどのような人物を求めておられるでしょう？だれにみことばを教えたいと願っておられるでしょう？私たちは戦場の最前線で戦いを為す兵士でなければなりません。私たちはこの世に出て行きます。神を憎んでいる者たち、神を知りたいと願わない者たちの前で、私たちは霊的な戦いを為すのです。そのときに私たちはみことばを知らないで生きて行けるでしょうか？私たちはみことばの知識を十分にもっているだけでなく、その知識をしっかりと生きる術を分らないで戦い続けることができるでしょうか？

私たちは正しい知識をもっていなければいけません。霊的に落ち込んでいるときに私たちが進んで行かなければならない道は、この正しい知識に基づいた道です。

## 2. 正しい歩み、正しい道を進んで行く 35節

### a. 進んで行く方向を変える

そのことが35節に記されています。「私に、あなたの仰せの道を踏み行かせてください。私はその道を喜んでいきますから。」と。私たちがみことばを正しく理解して生きて行くなら、私たちは正しい道を歩んで行かなければいけないのです。それがこの35節で著者が私たちに教えていることです。私たちは歩んでいるその道の方向、進んでいる足の方向を変えなければいけないのです。霊的な健全さへと立ち戻って行くために、私たちはみことばの知識に基づいて進んで行く方法を変えて行かなければいけません。著者はこう言いました。「私に、あなたの仰せの道を踏み行かせてください。」と。はっきり分かっていることは、私たちは正しい道を進まなければいけないということです。前の節でも言ったように、最初に出て来る祈りのことばは「踏み行かせてください。」ですが、このことばは33節にある「道」ということばの動詞形です。まだ、そこに焦点があることがよく分かります。このように「どうぞ神さま、…行かせてください。」という形で使われるとき、神学辞典ではこのように説明されています。「このことばがこういう祈りの中で使われるときにそれは、神が私たちの歩みを義のうちにあって真っ直ぐに正しく進んで行くように導いてください、と祈っていることである。」と。神が私の歩みをしっかりと導いて義

の中に歩いて行くことができるようにしてくださいという祈りです。まさに、その祈りがここで為されているのです。このことばはイザヤ書42：16でイスラエルの民が捕囚から導き出されることを表わして使われていることばです。神がご自身の民を導いて道を進ませてくださるのです。「わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。」。

また、注目していただきたい事柄は「仰せの道」です。ここでも「道」とありますが、これは33節にある「道」、また、25節からずっと使われている「道」とは違うことばが使われているのです。この「道」は非常に興味深いことばです。この単語が使われることによって言い表していることは、多くの人たちが辿った道のことです。皆が歩いて来た道、今までそこにあり続けた道のことです。よく旅をされている道です。新しい道と対比されています。著者が言っているこの道は、全く新しいだれも歩いたことのない、私たちが自らの手で切り開いて行かなければいけない道ではなくて、これまでもずっと、神を信頼し神に喜ばれたいと心から願って生きて来た者たちが歩んでいる道なのです。この道はエノクが神とともに歩いて天へと連れて行かれたその道です。アブラハムやイサク、ヤコブ、ダビデ、あらゆる信徒たちが歩み続けた道です。それは「あなたの仰せの道」、神のみことばの道です。

この道は神が示してくださったみこころ、みことばに沿った道であって、私たちが勝手に切り開く道でも、今のはやりの道でもありません。私たちはみな同じように、この「あなたの仰せの道」を歩むことに困難を覚えます。事実、神の助けなしにだれひとりこの道を歩み続けることはできません。だから、著者は祈ったのです。「主よ、どうぞ、私がこの仰せの道を歩み続けることが出来るようにしてください。歩ませてください。」と。この道を歩いて行くために私たち自身の力では十分ではないのです。私たちに神の力が必要なのです。私たちは神に助けられなければいけないのです。皆さん、私たちが歩まなければならない道は、神のみことばの道です。この道は多くの敬虔な信徒たちが歩み続けた道です。古くからあり続けた道、信仰の勇者たちが進み行った道です。私たちは新しい道を探す必要はありません。最新の流行に基づいた道を選ぶ必要はないのです。もし、キリスト教会の中で「これが今私たちが進む行くべき道です」とか、「これが私たちの個人的な成長をもたらす道です」ということを聞いたなら、どうぞ、みことばと照らし合わせてよく考えてみてください。私たちに新しい道は必要ないのです。進み行かなければならない道は古くからあり続ける道だからです。そこを歩まなければいけません。

#### **b. 喜んでその道を歩んでいる**

歩むに当たって著者は「私はその道を喜んでいきますから。」と言います。私たちはこの道を、この歩みを喜びとしていなければいけません。「神の仰せの道」は非常にたくさんあって大変ですが、その道を歩みたい、なぜなら、それが私の喜びだからと言います。自分が何かを得られるから、自分の得になるからでもありません。それが私の喜びだから、なぜなら、その歩みをするなら神が喜んでくださることを知っているからです。確かに、私たちは神の仰せを守らなければなりません。クリスチャンであるなら責任として、義務として与えられていることです。でも、私たちがその道を歩むことは、神がむりやりそれを押し付けて私たちが強制的にそれをしなければいけないからではなく、私たちがその道を歩むことを心から喜びとしていっているからです。

「神を愛するとは、神の命令を守ることです。」（Iヨハネ5：3）とヨハネは言いました。詩篇の著者はこのように言います。「まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。」（詩篇1：2）。40：8には「わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」とあります。パウロは同じようにローマ7：22で言いました。「すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいのに、」と。外なる人は弱いのです。葛藤があるから…。でも、なぜそのような葛藤に屈することなく、外なる人のプレッシャーに負けずに神が喜ぶ道を私は歩んで行きたいと願うのかというと、それは私の内なる人は神の律法を心から喜んでいっているからです。皆さん、喜んでいきますか？その喜びに基づいて私はその道を歩んで行きたいと願っていますか？それとも、神が求める歩みをするのは苦痛ですか？ときに、そのように思うことがあるかもしれません。でも、私たちがもつべきものは、このみことばに対する喜びです。これは私たちに喜びを与えてくれる「本」です。神に喜ばれる生き方こそが、私たちに真の喜びをもたらす道です。

#### **3. 正しい優先順位をもっている 36-37節**

たとえ、私たちが良い理解をもっていたとしても、また、まさにこの道を喜びをもって歩んで行きますと言っていたとしても、私たちは多くのときに失敗します。道から逸れてしまいます。なぜ、そうなるのか？そのひとつの原因はここにあるでしょう。それは私たちが正しい優先順位をもっていないことです。他のところを見ているからです。そのことを著者は36-37節でこのように教えてくれます。

「私の心をあなたのさとしに傾かせ、不正な利得に傾かないようにしてください。：37 むなしいものを見ないように私の目をそらせ、あなたの道に私を生かしてください。」。これらの二つの節から、私たちは非常に重要な

ことを学ぶことができます。

#### a. 心を神のみことばに傾ける 36節

正しい優先順位をもつようと教えようとした著者は私たちに、「あなたはあなたの心を神のみことばに傾けなければいけない。」と言います。著者は自分の心の状態を正しく理解していました。だから、「私の心をあなたのさとしに傾かせて」くださいと言うのです。そうでなければ自分の心は「不正な利得に傾く」からと言います。この地上の様々な事柄に傾いて行くと、「不正な利得」と訳されているこのことばは「不正、利己主義、もしくは、罪深い方法に基づいて自分が利益を得ること」を言っています。旧約聖書をギリシャ語に訳した70人訳聖書では、このことばは「むさぼり」と訳されています。

新約聖書でこの「むさぼり」ということばをどのように使っているのかを見ると、私たちはここで言わんとしていることがよく理解できます。たとえば、ローマ1:29には「彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪たくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、」とあり、生まれながらの人間は「むさぼりに満ちた者」なのです。エペソ4:19には「道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。」と記されています。エペソ5:3では「あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、不品行も、どんな汚れも、またむさぼりも、口にすることさえいけません。」と言っています。クリスチャンになったのだから、そのような「むさぼり」をしてはいけないと言うのです。コロサイ3:5にも「ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。」とあります。私たち人間は生まれながらに「むさぼり」に心が傾いているのです。そのことがよく分かっている著者は、「どうぞ神さま、私の心があなたに傾くようにしてください。」と言うのです。

私たちの心は神と神のみことばに傾かなければいけないのです。この世に傾いてはいけません。イエスは言われました。マタイ16:26「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」。私たちの心は元々この地上の事柄に傾いています。神の前に正しく歩んで行きたいと心から願っている私たちも、様々な場面でこの世の事柄に心傾き続けることがあるのです。だから、「どうぞ、私の心をあなたとあなたのみことばに傾かせてください」と言うのです。皆さん、私たちは自らに問い掛けなければいけません。私たちが本当にこの地上の様々な利益に目を向けているのか？それとも、天に宝を積むことに思いをもっているのか？どうですか？皆さん。私たちの周りには私たちが惑わすものがたくさんあります。皆さんが神の前に喜ばれる道を歩んで行きたい、落胆から解放されて様々な困難の中でも勝利を収めるような生き方をして行きたいと願っているときに、その道を塞ぐものはこの世のありとあらゆる事柄です。それらの事柄に私たちが目を向けるときに、私たちは本来進むべき道から目を逸らして、私たちの心が傾いている方へと流れて行くのです。いろいろな問題があって不安になることがあります。解決しなければならない問題、切迫する問題があるとき、私たちはそれに目を向けてしまっ、どのように解決することができるのかということばかりが頭にあるゆえに、神が求める事柄から目を逸らすのです。確かに、この地上のことで大切なこと、必要なことはたくさんあります。でも、永遠に意味のあることは非常に少ないのです。神のみことばに思いを潜めることが私たちには必要なのです。だから、この著者は言うのです。「私の心をあなたのさとしに傾かせ、」てくださいと。

#### b. 永遠のいのちのすばらしさ、その祝福に目を向け続ける 37節

この世の事柄に目を傾けるのではなく、神のみことばに心傾け、私たちは永遠の祝福に焦点を当てなければいけません。「むなしいものを見ないように私の目をそらせ、あなたの道に私を生かしてください。」と言います。単に、心を傾けるだけでなく、神の道を、私たちが与えられている永遠のいのちを十分に喜び、それを満喫して生きることができるよう、そこに目を向けていなければいけないのです。彼は言います。「むなしいものから私の目を逸らせてください」と。前提としているのは、むなしいものに目が向くことです。むなしい事柄に心が傾くのです。だから、著者はそのことが分かっているゆえに、神にお願いするのです。「どうぞ、私の目をむなしい事柄から逸らせてください」と。

興味深いことは、著者は「罪から目を逸らせてください」とは言っていないことです。「むなしいこと」です。確かに、そこには「罪」も含まれるでしょうが、それよりも遥かに多くの事柄があります。私たちは往々にして、むなしい事柄に目を向けます。もしかすると、むなしい事柄にしか目が向いていないかもしれません。本当の喜び、本当の満足は神の御国にしかないことをよく分かっているながら、私たちはむなしい事柄を追い求めるのです。私たちはむなしい事柄に時間を費やします。むなしい事柄に労力を使います。そして、何とかしてそのむなしいことで私たちの人生を満たそうと努力しますが、真の喜び、満足はそこにはないのです。

ローソン先生はこのように言われました。「クリスチャンが人生の中で体験する最も困難な選択は、良いものと悪いものとの間にある選択ではなく、良いものより良いものと最高のものとの間にある選

択だ。ここで著者は主が彼の目をむなしい事柄から逸らせ、全く意味のない事柄に捉われないようにと願って祈っている。」と。皆さんはどこに目を向けますか？私たちは良いものとより良いものと最善のものとの間で選択をします。確かに、いろいろなことは良いことで、私たちの心はいろいろなことに目を向けるのですが、でも、その中で永遠に価値のないものは余りにもたくさんあります。それらは私たちの生活を喜ばせるものであるかもしれませんが、それ自体が罪であるとか、何か悪いものではないかもしれませんが、私たちがどこに目を向けるべきかと問われるなら、それは永遠に価値のあることです。皆さん、どうですか？永遠に価値のあることに目を向けていますか？永遠に価値のあることが皆さんの人生の原動力になっていますか？皆さんが集中していること、追い求めていることになっていますか？確かに、テレビ番組を見たり、ドラマに熱中したり、スポーツをしたり観戦したり、様々なファッション、音楽、食べ物、家を飾り付けること、庭仕事など、いろいろな趣味を楽しむことは、それ自体は悪いものではありません。しかし、もしそれが皆さんの心を支配し、皆さんが追い求めることになっているなら、それほどむなしいことはないと思いませんか？

私たちは主の道を歩まなければいけません。何を優先しますか？永遠に価値のあるものに時間をかけようとしていますか？それとも、この地上だけのむなしいものに目を向けますか？悪い！と言っているのはありません。それが間違っているとも言っていない。ただ、もし、皆さんが永遠の事柄に目を向けることをしないで、この世の様々なことに目を向けているなら、私たちはいろいろなところで満足を得ようとしてもそこにはむなしさしか残りません。だから、落胆から抜け出すことができないのです。真の喜びを得ないからです。気を紛らわすことが悪いではありません。でも、どれ程気を紛らわせることができたとしても、この世の事柄でそれをするなら、いつまで経っても問題は皆さんの上にあります。神は言われます、「わたしに目を向けなさい」と。私たちはそのような生き方をして行かなければいけないのです。私たちはそのように生きなければいけません。私たちにはそのような責任が与えられているのです。

#### 4. 正しい恐れをもつこと 38-39節

##### a. 神のみことばに立つ 38節

38節に「あなたのことばを、あなたのしもべに果たし、あなたを恐れるようにしてください。」とあります。ここにある「果たし」とは「建て上げる、確かにする」という意味があります。基礎を築く、それが揺るがないようにすることです。私たちの信仰が根底からぐらつくことはありませんか？私たちの人生が揺らされて立つことができなくなるような思いに駆られるときはありませんか？今の日本がそのような状態です。そのときに、私たちが立っていなければいけないところは神のみことばだと言います。様々なことが津波のように私たちに押し寄せきて、私たちが今まで築き上げて来た様々な事柄に絶望することがあります。でも、その中で立ち続けるものがある、それが神のみことばだと言うのです。

多くの人たちはそのような問題が起こるときに、正しいところから目を離してしまっただけで、つまずくことがあります。でも、著者は言います。「あなたのことばを、あなたのしもべに果たし、あなたを恐れるようにしてください。」と。神のみことばは確かなものです。確信できるものです。私たちがそれをしっかりと理解しそのみことばに堅く立つときに、私たちはこの地上において自分の立っている場所が、すべてその土台がなくなったとしても、私たちは神のみことばに信頼を置いて、そこに立ち続けることができるのです。そのようにするとき「あなたを恐れるように」と言うのです。神のすばらしさ、偉大さを知って、神の前に立つことがいかにすごいことなのかを知るのです。

ヨブのことを思い出してください。大変な困難が来ました。彼は落胆しました。ヨブ2:8に「ヨブは土器のかけらを取って自分の身をかき、また灰の中にすわった。」とあり、3章からその絶望が記されています。彼はどのようにして回復しましたか？神が彼の前に現われて、神がいかに偉大であるかを彼に直接指導したのです。神の偉大さを知ったときに、ヨブは再び神への恐れを取り戻したのです。彼は回復しました。「主を恐れることは、知恵の初め。これを行なう人はみな、良い明察を得る。主の誉れは永遠に堅く立つ。」(詩篇111:10)。箴言1:7では「主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。」と言いました。神を恐れることが、私たちが正しく問題を解決して行くために必要な事柄です。そのために必要なことは私たちのうちに神のみことばが確かにあることです。

皆さん、地震があったから神の良さを疑いますか？神がすばらしい愛をもって私たちに接してくださっていることを疑いますか？こんなに困難な世の中だから…。疑う人たちはたくさんいます。でも、主の前に正しく歩んで行こうとするなら、みことばの正しさをもって私たちは確信を持ち続けなければいけないのです。みことばが示す神の前に恐れを抱きひれ伏さなければいけないのです。それが私たちの使命であり、それが私たちの生き方です。

##### b. 他のもへの恐れを取り除く 39節

そして、私たちは他のもへの恐れを取り除かなければいけません。そのことが39節に記され

ています。「私が恐れているそしりを取り去ってください。」と彼はそのように祈るのですが、この「そしり」とは42節に記されているように、他の者たちが彼のことをそしっている、嘲っているのです。神を恐れた神の前に正しく生きようとするなら、そのような嘲りがあります。それは確かにいやなことです。だれもそのことを喜びません。著者は言います。どうぞ、あなたがそれを取り去ってくださいと。むしろ、あなたに対する恐れと人に対する恐れを入れ替えてくださいと言います。「あなたのさばきはすぐれて良いからです。」と付け加えています。なぜなら、人生にはいろいろな難しい問題があるかもしれないけれど、あなたが為してくださることはすべて良いことだと私は知っているから、私はその恐れをあなたに委ねます、置き換えてくださいと言います。あなたは偉大ですばらしい最善を為す方だと知っているから、私が周りを恐れるのではなく、あなたを正しく恐れるようにしてくださいと。そのような恐れをもって歩むときに、私たちは初めて回復への道を進むことができるのです。

#### 5. 正しい願い 40節

「このとおり、私は、あなたの戒めを慕っています。どうかあなたの義によって、私を生かしてください。」。

##### a. 慕っています

「慕っています。」とあります。それこそが私たちがこの道を進んで行く原動力です。あなたを心から慕い求めている、あなただけを願っていると。興味深いことは、著者はここで「あなたの約束」とは言わないで「あなたの戒め」と言っていることです。私たちは良い約束を慕い求めると思いますが、でも、彼は「あなたが求めているありとあらゆる要求を私は慕い求めている。」と言います。たとえ、それが自分に苦しいことでも、自分に困難なことでも、あなたが求めるなら私はそれを心からの願いとして進んでいきますと言います。なぜなら、そこに幸いがあることを彼は知っているからです。

##### b. あなたの義によって

最後にこのように言いました。「どうかあなたの義によって、私を生かしてください。」と。彼が心から願ったことはまさにこれです。私があるあなたが与えてくださるすばらしいのちを十分に満足をもって、最大限生きることができるよう、そのように変えてくださいと。それは「あなたの義」のうちです。神のみことばに沿って生きるその歩みには完全な満足の生涯が待っているのです。

私たちは多くのときに失敗します。でも、私たちはこの人生を生きなればなりません。なぜ、失敗するのでしょうか？私たちの理解が足りないからです。私たちの知識が十分でないからです。その知識をしっかりと悟って、それを正しく歩んで行こうとする決意が足りないからです。実際に、歩みを変えないからです。「分かっているのだけれど…」と私たちはいつも言い訳をし続けるからです。私たちが神が求めること、永遠に価値のあることに目を向けるのではなく、それ以外のこの世だけの一時的な喜びしかもたらさない事柄に目を向けて、神が喜ぶことに目を向けることを止めてしまうからです。それらを優先しないからです。私たちが神を恐れることを忘れるからです。周りの事柄を恐れてしまって、私たちの永遠を取り定めることが出来る神に対する恐れを抱くことを恐れるからです。どんなに偉大な神であるのかをみことばを通して知っていながら、その神がまるでいないかのように私たちが振る舞うことがあるからです。そして、私たちが「あなたを慕い求めます」という願いを熱くたぎらせないからです。

皆さん、私たちは落ち込みます。何度も言うように、でも、クリスチャンであるならその落胆の中に留まり続ける必要は一切ないのです。なぜなら、そこから回復する道を、その方法を神は示してくださっているし、何よりも、その道を歩むことができるようにしてくださるのは神だからです。私が愛して止まない方、私たちのことを愛して止まない神が、私たちを助けてくださるのです。

私たちは困難が起こるときに神の前に祈ります。私たちの恥ずべきことは、困難が起こらないと神の前になかなか祈らないことです。けれども、私たちがこの詩篇の著者が祈るように祈り続けて行くなら、神は私たちを助けてくださいます。皆さんの祈りはこの著者の祈りを反映していますか？そのように祈り、そのような決意をもって生きていますか？私たちができないことを認めましょう。でも、全能の神のすばらしいところは、これ程どうしようもない、全く力なく生きることさえも出来ない、主に喜ばれることをひとつも選択することのない愚かで罪深い私たちを、神が喜ぶ者へと変える力をもっておられる全能の方だということです。それが私たちの神です。その神を信頼しましょう。そして、その神が求めるように歩んで行きましょう。祈りましょう！神が私たちを変えてくださるよう。